

## 『五感刺激のブランド戦略—消費者の理性的判断を超えた感情的な絆の力』

マーチン・リンクストローム著／ルディー和子訳 ダイヤモンド社 定価2,520円

社会科学では消費者は価格等に対し合理的に選択行動を行うとされる。対して本書は、理性による合理とは異なるもう一つの合理性が存在することを、独自調査をもとに明らかにしようとする。キーワードは知覚である。知覚は厳然として存在し、人々の行動を内面から規定する。誰でもあるメロディを耳にすると、特定の場所やそこにまつわる記憶が甦ることがある。匂いについてはさらにそうかもしれないと。にもかかわらず、マーケティングにおいてその全貌はきちんと把握されることはなかつたという認識が本書での出発点となる。

## 五感刺激の



キーワードは知覚である。知覚は厳然として存在し、人々の行動を内面から規定する。誰でもあるメロディを耳にすると、特定の場所やそこにまつわる記憶が甦ることがある。匂いについてはさらにそうかもしれない。

することなどさえない。企業イメージやブランドをラベルを通して消費する。試しに清涼飲料水のラベルをきれいにはがしてみてほしい。そこに残るのは得体の知れぬ色の液体の入った容器である。誰がこんなものを飲もうとするだろうか。人は液体を飲むのではない。イメージを飲む。

色)や、CMでの音声ロゴ(森永やコジマ電機)などがそれだ。しかし、その他の感覚についても、配慮が払われてこなかつたと著者は主張する。

嗅覚などはその典型である。本書によれば人間の感情を呼び覚ますものとして、七五%は嗅覚を媒介とするという。

確かに嗅覚に訴えるビジネスも存在している。ときどき都心で見かけるメロンパン売りなどは強烈な匂いを利用してゐる。あるいは、デイズニーランドで売られるポップコーンの甘い香りなども同様であろう。

これらの事例は本書で山のように出てくる。本来ロジカルに説明するのが困難な要因を、巧みに整理し一貫性あるマトリックスに落とし込む。いずれもいわれてみれば思い当たることばかりである。

「合理的」に行動するはずの人間が、実は生物的な条件により半ばオートマティックに反応する姿が、いやおうなしに浮かび上がる。いわばパブロフの犬方式であり、ブランドなどはその

色や、C Mでの音声ロゴ（森永やコジマ電機）などがそれだ。しかし、その他の感覚について、は、配慮が払われてこなかつたと著者は主張する。

嗅覚などはその典型である。本書によれば人間の感情を呼び覚ますものとして、七五%は嗅覚を媒介とするという。

確かに嗅覚に訴えるビジネスも存在している。ときどき都心で見かけるメロンパン売りなどは強烈な匂いを利用している。あるいは、デイズニーランドで売られるポップコーンの甘い香りなども同様であろう。

これらの事例は本書で山のように出てくる。本来ロジカルに説明するのが困難な要因を、巧みに整理し一貫性あるマトリックスに落とし込む。いずれもいわれてみれば思い当たることばかりである。

しかけの最たるものといえる。消費行動といった限定的な意味合いを超えて、さらに探究されべき課題のように思われる。

ただし、そこにおいて、方法を語ることの困難は留意されべきであろう。知覚とは本来が主観の産物である。水の半分入ったコップを多いと見るか少ないと見るか、これだけでも人間の価値観や置かれた状況においてとらえ方は違う。

とするならば、マークティングをはじめとする広い意味でのマネジメントの道具立てはいざれも科学にあらずということになる。むしろ医療と同様に、患者の治癒に関わる個別具体的な知的領域ということになる。

そのために本書が示すのは、道具発見にいたる「目印」である。知覚とは無数の糸につながる結び目ないし中継点である。それらを探り当てるのに必要な、ありうべき型やスタイルを示してくれる点において参考になるところは多い。

『過剰と破壊の経済学—「ムーアの法則」で何が変わるのか?』

池田信夫著 アスキーニュース 定価 760円

IT革命、情報革命、デジタル革命等呼称は多々ある。いずれも今日に至っている現実は、ここ数十年でつくられ、塗り替えられたものである。

IT小史であり、序説でもある。多くのすぐれた序説が、時代の深奥をえぐり取り、結果として出口のありかを暗示したように、本書も混迷の時代におけるアリスのうさぎのような役割を果たしてくれる。

思えば現在の急激な株安も、一時期話題になつたM&Aへの危機感も、ひいては地球温暖化問題でさえも、技術変化をその遠景に収めつつ進行するかに見える。

いうまでもなく、ここで語られる多くは、日本にとってバラ色とはいがたいものがある。技術の変化は必然的に意識の変化を生み、意識の変化は世界を変えてしまう。慣れ親しんだ昨日の世界



が、いつしかリアリティを失いつつ遠のいていく。チャンスの時代は危険な時代ともなる。

そこで複雑かつ危険な隠し絵の見方を示唆する重要な補助線が「ムーアの法則」である。從来この法則が過小評価されたことはないと思うのだが、その実態に改めて着目するならば、驚いても驚き足りないほど意味を持つことがわかる。

ムーアの法則は経験則である。「半導体の集積度は一ヶ月で倍になる」とされるもので、これはすでに三〇年以上続き、さらに一〇年以上は生き続けるといわれている。

かつて億円単位だったコンピュータが、今では一〇万円程度で手に入るのは、まさにこの

法則が機能し続けるためにはかなりの時間がかかる。換言するならば、時代は変転をやめえない。本書によれば、PCがボールペンのような感覚で使い捨てになるのはそう遠い未来ではないという。

本書は、技術進歩の核となる警告を敏感に感じとり、それを具象化しようとする。そのためには、現在置かれた状況のとりとめなさを、言葉やコンセプトに置き換えていく作業が必要となる。恐らく引用されるマルクスも、同様の作業を十九世紀に行つた理論家として意味づけられている。

多くの場合、技術屋は市場や社会に疎く、逆にビジネスに関わるものは技術がわからない。本書で取られるアプローチは、その架け橋でもある。スマッシュショットでは理解できないものを、その背後に文脈や脈絡をきちんと整理したうえで示してくれる。

著者による博士論文をもとにしたものの、それが、百知る者があえて一しか語らないときには似た神秘的な雰囲気、それに伴う、研ぎ澄まされた感性が光る。

社会生態学研究者  
森里陽一

るのにはありがたい。日常ではそれらの情報は断片的である。新聞や雑誌でピース状に示されることはあるが、一枚の曼陀羅として示されることはないからだ。

こうしてみると、ITは單なる道具をはるかに超えている。単なる道具を超えた意識や行動の営みを常に反映する。そこで世界とのつながりを意識することで鼓動と脈拍が聞こえてくる。血が通つてくる。

多くの場合、技術屋は市場や社会に疎く、逆にビジネスに関わるものは技術がわからない。本書で取られるアプローチは、その架け橋でもある。スマッシュショットでは理解できないものを、その背後に文脈や脈絡をきちんと整理したうえで示してくれる。

著者による博士論文をもとにしたものの、それが、百知る者があえて一しか語らないときには似た神秘的な雰囲気、それに伴う、研ぎ澄まされた感性が光る。

書

評

# 『メタル・ウォーズ—中国が世界の鉱物資源を支配する』

谷口正次 著 東洋経済新報社 定価 1,785円

原油高騰や政府の対策を受け、久しぶりに資源問題が真剣に議論されるようになつた。あつて当然と思われたものがなくなれば誰でも慌てふためく。それが日本の強みたる製造業を直撃するならばなおさらである。近年の混乱を見るにつけて似かよつた構造に気づかされる。食料、マネー、資源などみなそうだ。本書のテーマである鉱物資源なども典型である。肝心のところはペー

ルに包まれている。なのにその影響は生活レベルに達している。わからなりにいりに、中国が何らかの関与をしているらしいことには勘づいている。正体がわからないものに対する人間の行動パターンはさほど豊かなわけではない。

まず犯人探しが始まることで、「犯人であつてほしい」誰かを見出。希望的観測が事実と



とり違えられ、やがて集中砲火にいたる。魔女狩りに似た状態である。だが、本来の対応策は正しい情報をする、これ以外にありえない。本書が試みるもの判断と行動に必要な事実の提示である。著者は長年鉱山をはじめ現場に身を置いた数少ないプロの一人だ。もてる情報と知識・経験が凝縮的に示されている。

鉱物資源、わけてもアメタルなどは通常あまりなじみがない。しかし、携帯電話、PC、ケーブル、飛行機などなど、すでに日常生活に入り込んだ製品の神経部分を形成する。その現状と将来像について、①現状の課題、②派生問題、③今後の処方箋を的確に示している。いずれも未來の行動指針として不可

欠なものであり、得心がいく。まず、誰が何をしているのか。肉食恐竜の比喩で語られるメジャーの復活、そしてそれ

に立ち向かう巨竜・中国。これが資源争奪の構図である。そして日本はおこぼれをついばむ鶏なのだそうだ。

筆者はこのような日本の戦略なき実態に批判的である。これまで、いわゆる川下過程に力を入れることで、ものづくり立

国たりえた。他方、川上過程、すなわち自主探鉱・採鉱は商社任せだった。これでは不安定の度合いが高まると手綱を自らの手で握れなくなる。

それに對し、中国はしたたか

このような戦争に比される大規模な争奪状況のなかで何をなすべきなのか。あるいは何をなすべきでないのか。状況を的確に判断し冷静に見きわめなければならない。これを戦略と呼ぶ。そこで著者が提案するのは意外に手間暇のかかるものである。それは教育である。著者はこれを資源教育の復興と名づける。いささか悠長な気もある。が、資源問題と教育問題こそ國家百年の計であることは間違いない。

が、探鉱にともなう汚染問題である。これは派生問題というにあらずかぬはずがないというわけだ。

系出身で、その道に明るい。これまで現代のイソップ物語である。そこに唯一の答えは存在しないのが困ったところだ。

もう一つ忘れてならないのは、多くの鉱物はわずかでも、鉱山開発を行えば周囲一帯を破壊せざる

社会生態学研究者  
森里陽一

# 『ポスト団塊世代の資産運用』

由里宗之・白岩千幸・陣場 隆著 きんざい 定価 2,730円

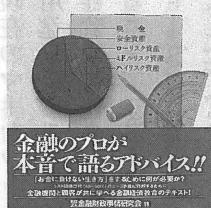
近年の傾向としては、どちらかというと誇大広告やいたずらに射幸心を煽るものが多い。近所の大きな書店に出向くと、わりあいに安直な、自己啓発がかった投資コマニーが多くの人を引き寄せているのを目にする。ごくふつうの人が株などの投資に手を染めるようになつたのはいつごろからか。最初は奇異に思えたものだが、今ではごく当たり前になつた。

携帯で四六時中株価を確認する人の姿が目につくようになつた。ワントリックで一〇〇万円以上儲けた経験を持つ知人がいる。彼の職業は大学の語学教師である。たぶん株だけではない。宝くじもパチンコもそうだ。射幸心を刺激するものが世に溢れている。

しかし、本当に大事なことは、もつと足下のこと、たとえば本書でいわ

## 『ポスト団塊世代の資産運用』

由里宗之・白岩千幸・陣場 隆著



金融のプロが  
本書で語るアドバイス!!

いるものの、その年代の方にしか有用でないかというとそんなことはない。というのも、資産運用を将来の不確実性への対応策ととらえれば、いかなる作為（不作為）にもリスクがある。家の購入も、結婚も、子どもを生み育てるのもリスクである。生きること自体がリスクである。評者は現在三五歳である。それでも、本書の多くはリアリティを持って読める。それどころか、自分のために書かれたのではと思えるところも少なくない。というのも、たぶん本書には二つの目論見があつて、いずれも成功している。

一つは投資教育の手引きであり、生きるとはリスクに対処する。生きるとはリスクに対するものとほぼ同義であるから、投資に関する体系的な知識を身に付けるとともに、その基本的な考え方を理解し、実行できる素地を持たなければならぬ。投資とは本来不確定な未来に対処する一連の知識である。そこに豊かさと多様さがある。その一端はコラムなどでもいきいきと描かれている。大事な考え方だ

れる勤儉貯蓄や夫婦でよく話しあうことといったシンプルなものではないか。

過剰な情報が飛び交うなかでは、かえって地に足着いた言説が生彩を添びてくる。著者はいずれも金融実務のプロである。そのわりにはといつては何だが、投資への誘いといった色彩は驚くほどに希薄である。むしろ投資への基本的な姿勢・考え方を整理して示してくれるものである。

しかも資産運用の概説書にしては、楽しく読める工夫がなされている。全体のトーンは上手に統一感あるものとなつていて、大事なことから先に説明してくれる。コラムやアドバイスも充実している。大変親切な本だと思う。

団塊の世代が表題で謳われて

いるもの、その年代の方にしか有用でないかというとそんなことはない。というのも、資産運用を将来の不確実性への対応策ととらえれば、いかなる作為（不作為）にもリスクがある。家の購入も、結婚も、子どもを生み育てるのもリスクである。生きること自体がリスクである。評者は現在三五歳である。それでも、本書の多くはリアリティを持って読める。それどころか、自分のために書かれたのではと思えるところも少なくない。というのも、たぶん本書には二つの目論見があつて、いずれも成功している。

一つは投資教育の手引きであり、生きるとはリスクに対処する。生きるとはリスクに対するものとほぼ同義であるから、投資に関する体系的な知識を身に付けるとともに、その基本的な考え方を理解し、実行できる素地を持たなければならぬ。投資とは本来不確定な未来に対処する一連の知識である。そこに豊かさと多様さがある。その一端はコラムなどでもいきいきと描かれている。大事な考え方だ

社会生態学研究者  
森里陽一



# 『生きるための経済学——〈選択の自由〉からの脱却』

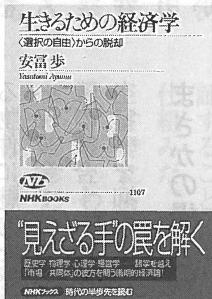
安富歩 著 日本放送出版協会 定価 1,020円

野心的な本が出たもの  
だと思う。

評者が本書の刊行を  
知つたのも、ある反知性  
を売り物にする研究者の  
ブログからだつた。

一読しただけで書評を  
するのがはばかられる大  
著である。二〇〇頁ほど  
だが、万巻の重みがあ  
る。

「人は自らの理論に合う  
ように、知らず知らずの  
うちに現実のほうを曲げ  
てしまうものだ」とは  
シャーロック・ホームズの  
言である。ページをめく  
りながら、いつしかこの  
言葉の真意に思いを馳せ  
ていた。現代の経済学批  
判として、まことに正鶴  
を得てゐるだけでなく、  
読み物としてもすぐれた  
仕上がりとなつてゐる。  
というのも、経済理論  
の持つ神経症的な側面を  
みごとに洗い出し、その  
原因を究明し、かつ今後



の指向性を示唆している。いず  
れもジャーゴン・フリーの典型  
であつて、持つて回つた表現は  
皆無である。読み手に過剰なプ  
ロセッシャーを与えない。

著者は学生時代、経済理論に  
何となく嘘臭さをかぎつけ、そ  
の道の研究者となつてからも、  
その感覚が去ることはなかつた  
という。積年の思いとともに、  
一つひとつしつこくメツキが剥  
がされていく。

いってみればこういうことで  
ある。人は「そうあつてほしい」  
(願望)が「そうあるべき」(當  
為)に変わり、やがては「そう  
である」(事実)に置き換えられ  
がちである。希望的観測が事実  
にすり替えられるのはよくある  
ことで、虚偽性の根源はこのあ  
たりにある。

市場や選択という概念から錯  
を丹念に落とし、その本来の形  
を確認したうえで、その部品自  
体の意味を改めて論じる。恐ろ  
しくなるほどに徹底している。  
そして、それらを経済学の用語  
をほとんど使用せず、その他の  
知識領域を総動員して挑んでい  
く。

そのなかで、著者自身の生々  
しいハラスメント体験や、ふつ  
うなら吐露しづらい話が説得力  
を高めている。だが、残念なが  
ら、たぶん本書はよほどのこと  
がないかぎり、その道の研究者  
から好意的には受け入れられる

经济学で前提される条件、た  
とえば情報の偏在性等の古典派  
以来の公理と呼ばれるものは、  
いつしか手段と目的が逆転した  
まま根雪のごとく無意識下に強  
固に潜伏していく。いつしかそ  
れは呪縛と化して、理論が優位  
するかのように思いをなし、現  
実のほうを曲げてしまふことに  
もなる。結果としてありのまま  
の姿を歪めてしまう。こうなる  
と穏やかではない。

人々が持つ生きづらさ、窒息感  
を正確に反映しているようにも  
思える。それは逃げるほどに締  
め付けてくる孫悟空の「きんこ  
じ」のようなものである。いわ  
ば負のフィードバックをもたら  
す桎梏である。

理論とは本来的に社会のあり  
方に対して一定の視野を与える  
ものでなければならない。今一度原  
点に返るためにも、あるいは原  
点がどこにあるのかを再確  
認するためにも、本書は重要な  
位置を持つに違いない。

社会生態学研究者  
森里陽一



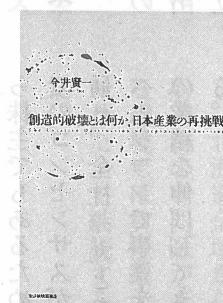
# 『創造的破壊とは何か 日本産業の再挑戦』

今井賢一著 東洋経済新報社 定価 3,360円

老練の視線が刺し貫く  
「もう一つの社会」のありようとは——？ そんな思いとともに、産業組織論、ネットワーク経済論の大本邦による新著を読んだ。

タイトル中の「創造的破壊」から想像されるように、鳴り響いてやまぬ通奏低音がシンペーパーである。確かにシンペーパーが偉大であることはだれもが知っている。新概念の提出者として知られる経済学者で、今なお世界に多くの共鳴者がいる。でも、シンペーパーの解説書ではない。解説書というにはるかに野性的である。

日本と世界の経済・産業構造を材料として、創造的破壊なるコンセプトの実践解への条件を示そうとする。あたかも、シンペーパーを使って超えてするかのようだ。



所期の復活を果たしえなかつたのか。また、現在もその可能性は残されているのか。老練の洞察がとらえる対象は大きく、かつ繊細である。

そのためか、論旨の流れや一つひとつつのトピックには熟練の技といつてもよい手並みのよさが際立つ。新しい現象を古く見て古い現象を新しく見せてく

る。かつてバブル崩壊後の日本を失われた十年と呼んだ。気づいていた。だが、なぜ日本産業はその強みにもかかわらず、んだ。

そこには一つの問題意識がある。かつてバブル崩壊後の日本を失われた十年と呼んだ。気づいていた。だが、なぜ日本産業はその強みにもかかわらず、

所期の復活を果たしえなかつたのか。また、現在もその可能性は残されているのか。老練の洞察がとらえる対象は大きく、かつ繊細である。

そのためか、論旨の流れや一つひとつつのトピックには熟練の技といつてもよい手並みのよさが際立つ。新しい現象を古く見て古い現象を新しく見せてく

る。それに最先端の事例やちよつとした面白い話、鍵となるコンセプトをきちんと整理して同じテーブルの上に置いて説明してくれる。その意味では、

この点が豊かさと彩りを添えている。というのも、情報や知識が資本となる社会が分析射程に入り、そう長い年月が経過したわけではない。だから、今一つ距離感がわからない。他方、

確かに本書の指摘にあるように、「市場を『作る』ことと『創ること』の違いは大きい。それでも、行間からにじみ出るのは、日本への期待である。半世紀以上の研究生活を経た著者の目から見る現代日本は想像もできないほどに魅力的で可能性に満ちている。日本全体を一大産業集積地としてとらえる観角は、ひとえにものの見方と解釈、そして行動にかかっていることが理解される。

本書で提出される「もう一つ

社会生態学研究者 森里陽一



## 『本社も経理も中国へ』

海野恵一著 ダイヤモンド社 定価1,500円

「私の目には、世界の流れの中から取り残され、沈んでいく母国がはつきりと映っています」。

本書の問題意識を右の一文はよく表している。そこには仕事人としての自負とともに、文明を担う者としての自意識が見え隠れする。

筆者は長くアセンチュアにコンサルタントとして勤務し、現在は中國中心にアウトソーシング事業を展開する企業家である。本書によると、筆者は自身家族とともに中國と馴染みが深く、独自の風土や文化のなかで暮らしているという。

中国ほどにわれわれの生活と密接な外国はない。先日の毒入り餃子事件はこのシンプルな事実をあまねく知らせることになった。日本各地の観光地、繁華街には中国語を話す集団が日常風景に溶け込んでいる。グローバル化とはつまるところ

「私の目には、世界の流れの中から取り残され、沈んでいく母国がはつきりと映っています」。

こうすることをいうのだなど実感させられる。異空間の日常化なのだ。

タイトルに表れているよう

に、中国とのBPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）という実務に関する記述が中心をなしている。アウトソーシングというと、経費節減のためになされるのが常識だった。だが、ここに書いてあることは違う。BPOは手段を超えてい

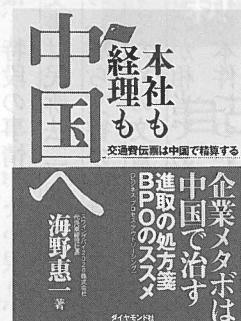
る。日本企業への前進と学習を促す装置、あるいは場としてとらえられている。筆者は中国の成長を元寇にたとえている。ただし、それは衝突によって克服されるものではない。互いに強みを生かし、成績によって世界を動かしていくことによってしか解決されない。いわばその答えの一端がア

ウトソーシングにあると考えられているわけである。事実、BPOはビジネスとしてさらに有

効率化されている。ウトソーシングにおける考え方、言語体系も違った。そしてお互いに失望している。「脅威と恐怖」「蔑視と差別」が瀰漫しつつある。

中国ビジネスを主として手が取れる筆者によれば、このような理解のギャップはチャンスともらえられる。日本が変わったチャンスであり、沈没を回避し雄飛する機会と見る。それを仕事として実践している様にリアリティをかき立てられる。

「一年の計は穀を樹うるに如くはなく、十年の計は木を樹うるに如くはなく、終身の計は人を樹うるに如くはなし」（管子）。繰り返し示される一つのビジョンは人材に関わるものである。日本がグローバル化を「ここ」として、それを脅威ではなく機会として勇躍する最良の学校をつくろうとしているかのようだ。そのためには、単なる情報としての知識ではなく、行動を促す装置としなければならない。実感させてくれる一冊である。



筆者は仕事として、①データエンタリーサービス、②コールセンターサービス、③ITサービス、④業務包括委託サービスを通じて、日中を具体的に結び付けていく。

筆者は住友化学のような代表的な企業の成功例も語られる。

同時にBPOを通じて、三〇年後の世界を垣間見せようとしている。そこで提起される重要な問題が一つある。日本人が中國を理解していないということである。確かに、われわれは事象レベルでは中国を知っている。毒入り餃子も知っている。チベット問題も知っている。でも、彼らの内側については何も知らない。知りたくない。引用される調査によれば、日本人の七割弱は中国に対し、「悪い印象」を抱いているとい

う。実際のところ、日本と中国は行動文法が違う。言語体系も違う。そしてお互いに失望している。「脅威と恐怖」「蔑視と差別」が瀰漫しつつある。

中国ビジネスを主として手が取れる筆者によれば、このような理解のギャップはチャンスともらえられる。日本が変わったチャンスであり、沈没を回避し雄飛する機会と見る。それを仕事として実践している様にリアリティをかき立てられる。

「一年の計は穀を樹うるに如くはなく、十年の計は木を樹うるに如くはなく、終身の計は人を樹うるに如くはなし」（管子）。繰り返し示される一つのビジョンは人材に関わるものである。日本がグローバル化を「ここ」として、それを脅威ではなく機会として勇躍する最良の学校をつくろうとしているかのようだ。そのためには、単なる情報としての知識ではなく、行動を促す装置としなければならない。実感させてくれる一冊である。

社会生態学研究者  
森里陽一

# 『職場を悩ます ゆとり社員の処方せん』

池谷聰著 朝日新聞出版 定価1,470円

ゆとりという言葉が、ややネガティブに使われるようになつたのはいつからだろうか。本来は余裕があつて窮屈でない、相前向きの意味を持つはずである。本書のはしがきではこんな風に描写されていいる。

「ほんの少し注意しただけで心療内科の診断書を持ってきた」「自分のやりたい仕事しかやりたがらない」「上下関係がまったく通用しない」「何でもメールで済ませようとする」「突然、前触れもなく退職してしまふるほど——。」

本書の流れを見ていても、これらに例示されるような事象をいちいち「不協和」ととらえ、その溝を埋めるアプローチが採られている。例示→意味→処方という流れで構成されるのが特徴といえるだろう。身近に同様の

「症状」があり、悩まされているなら、処方せんとして試してみる価値はあるのかもしれない。だが、話はこれまで終わらない。本書の提起する問題が、相手に深く重要なからだ。誰も気づかなかつたものを指摘した点において、その意義は小さくないと思う。

繰り返す。「ゆとり教育」が問題だという。確かにそうかもしれない。先の例示から推察するに、深層には行動様式や意識の壁、デジタル技術への慣れによる意思疎通の困難さ、そして何よりも前提となる社会観の相違が新世代と旧世代を分けてしまっている、少なくともそう主張しているように見える。だが、本当にそうだろうか。もしそうだとすれば、世代によ



じつは本書の泣き所はこの「ゆとり社員」なるものの定義のあいまいさにある。感性的に把握されているために、しばしば論理が逆立ちする。では、処方にある部分が役に立たないかというと、そんなことはない。ゆとり社員以外の人々が、自らの行動や価値観を客観的に見直し、反省する足がかりを提供する、まさにこの点においてである。むしろ、処方せんを受け取るべきは旧世代のほうである。

というのは、第一次大戦の後、「戦後派」（アプレゲール）というだけで、生意気で秩序を重んじない不実な連中というレッテルが貼られていた。考えてみれば、古くからその場に生息する者どもはわが身かわいさに新参者にレッテルを貼つて見

る思考や行動様式の違いを問題と認識していることになる。確かにそれが具体的な業務遂行に支障を及ぼすならば問題であるに違いない。しかし、問題に特定することは質的に違う問題である。

じつは本書の泣き所はこの「ゆとり社員」なるものの定義のあいまいさにある。感性的に把握されているために、しばしば論理が逆立ちする。では、処方にある部分が役に立たないかというと、そんなことはない。ゆとり社員以外の人々が、自らの行動や価値観を客観的に見直し、反省する足がかりを提供する、まさにこの点においてである。むしろ、処方せんを受け取るべきは旧世代のほうである。

もしかすると、企業という手垢の付いた装置は、新しい学校なのかもしれない。本書で示される手法が一つひとつ一流とは思わない。しかし、本書で発せられる問題意識は一つひとつ

下す。その際に、反省的な視点はきれいに忘れられている。今はさして変わらない。

現在は、価値観や技術変化も手伝って、理念と現実の間にぽつかりと穴が空いた状態である。それを簡単なハウツー的手法で埋めることなどはじめからできはしない。その事実を虚心坦懐に見つめ直すべきなのだ。

そこで一つ、本書のなかで評価できる手法がある。それは「問い合わせる」ことである。問うとは、相手から何かを引き出す際のもっとも簡便で賢明な方法である。本来教育 education は「引き出す」から来ている。そのうだが、それを企業の中で堂々と実践せよと主張するわけだ。

もしかすると、企業という手垢の付いた装置は、新しい学校なのかもしれない。本書で示される手法が一つひとつ一流とは思わない。しかし、本書で発せられる問題意識は一つひとつ

社会生態学研究者  
森里陽一



# 『国力論——経済ナショナリズムの系譜』

中野剛志 著 以文社 定価 2,310円

どうも日本の調子は思  
わしくない。激しい失調  
に見舞われている。思え  
ば八〇年代の狂騒、九〇  
年代一転しての自信喪  
失、何か不吉なダツチ  
ロールのなかにいるよう  
だ。調子が悪いときは、  
原因を調べるしかない。  
表面的な症状から推論し  
て真因を見出さなければ  
ならない。

ビンソン、ミュルダール、クズ  
ネツツは悪用されたままであ  
る」  
ものものしいタイトルに加え  
て、日蓮を思わせる警世意識で  
ある。だが反対に、本書のなそ  
うとすることは地に足着いたも  
のである。一言で言えば、「レッ  
テルをはがす」ことである。  
そのためとはいっても、たったひ  
とつの命題をここまで執念深く  
突き詰めていく本も珍しいだろ  
う。その命題とは、「経済とは  
本質的にナショナルなものであ  
る」に尽きる。  
経済学の教科書に出てくる無  
色透明な仮定などどこにも存在  
しない謬説であり、主たる経済  
学説史のなかにも見あたらない  
ばかりか、むしろ逆の主張がな  
されて いることを論証しようと  
する。

確かに経済自由主義とはグローバル経済の基礎を構成する理論として、われわれの脳に刻み込まれてきた。確かに現在の状況をグローバル化と切り離して考えようとするならば、どうかしていると思われるのがおちだろう。

だが、偉大な気づきはあるものである。グローバル化は他方で国家の役割を高めていくところがある。著者はネイショングローバル（国柄、国民、それにまつわる制度、慣習を含む）に経済の実体を見出そうとする。いや、むしろ経済をその付随物と見る。

本書では著名な経済学者の著書の「あえて（あるいは故意に）読まれなかつた」部分に焦点を当て、その真意を描出す。そして、共通する「忘れられた系譜」を大胆に提示していく。

その際、どちらが主でどちらが従なのか。あるいはどちらが正統でどちらが異端なのか。読んでみると、鏡の世界が実体で、今いる世界がその反映に過ぎないかのような不思議な感覚を覚える。

これはささやかな発見とするにはあまりに意味深長である。それは自由を軸とした経済現象の一辺倒の理論体系から、国家といふ人間集団を軸としたものへの移行（回帰？）を迫るからである。

実際、英語で *national* というと「國家の」という意味とともに、「社会の」という意味もある。ナショナルの経済学とは、社会の経済学であり、政治の経済学でもある。経済現象とは複雑な諸現象の一部に過ぎぬとする理論体系である。

古典派とされる論者たちが目指したものは、政治経済学であった。本書の目論見は政治経済学の復権にあろう。ゆえにか、最終的に本書が目指すものは政治的であり、論争的であり、野心的である。だが、その具体像は本書には現れていない。かすかにほのめかされる程度である。批判の後には建設が来るはずだ。これで次作を構想していなければおかしい。

森里陽一

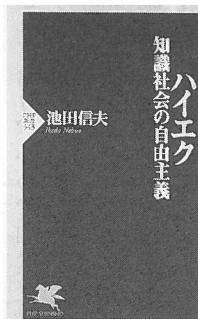


# 『ハイエク——知識社会の自由主義』

池田信夫著 PHP新書 定価735円

北京オリンピックが閉幕して、少し落ち着いたかと思いつつ矢継ぎ早に世界に激震が走るのだ。われわれが不確実性の高い世界に住んでいる事が改めて実感される。大倒産そのものよりも、それに対するA・グリーンズパンのコメント「一世紀に一度」のほうが新鮮味があり、印象に残る。現実には、先日のサブプライム、一〇年前のLTCM、さらには二〇年前の日本のバブル崩壊などなど、起てる可能性のある変事は結局起こってしまう。

すでに情報や知識が高度に相互依存する社会が目の前にある。なのにそこにはまだスローガンはない。それらしきものさえない。われわれが目にしているのは、新しいタイプの無秩序だからだ。本書はまず刺激的なブログで有名な著者によ



る、ハイエク再入門である。人の経済学者あるいは思想家を取り上げるにしては、その力バーする範囲は多岐に渡っている。ハイエク「を」読むとともに、ハイエク「で」読む。ハイエク自身の名前はよく知られている。ノーベル賞も受賞している。他方、ケインズが戦後隆盛を極める一つの学派を作ったのに対し、ハイエクには厳密な意味で学派らしきものはない。孤高で神秘的なだ。かといって、本書はよくある「ハイエクには誤解されている」「ハイエクには隠された意図があつた」というものではない。「ハイエクが現代の状況を見たら何というか」という空疎なものでもない。むしろ、まざまざと展開の仕方は、特定の原理を極めていくよりも、原理に對して反発的であろうとする。異次元の体系化を試みていたよ

うに思われる。そのハイエクを通じて、本書でもさまざま論争的な課題が次から次へと示され、そのつど批判の矢面に晒していく。そして議論は本丸のインターネットの世界にいたる。最終章がインターネットの発展と生息的秩序として締めくくられるのはむろん偶然ではない。

「ハイエクの自律分散の思想をネットワークで実現したインターネットは、彼の予言どおり、WWWが登場してからほとんど数年の中に世界中の電話会社の人工的秩序を破壊し、グローバルな自生的秩序となっ

る。

た」。

確かに、ネットの現状と展開は奇跡である。自生的秩序といふ観念を通して理解はおろか観察もしきれない。

すでにネットを認容しないシングルを評して「彼は政治的な必要性に迫られて堕落したのです」と言つたという。その論の

展開の仕方は、特定の原理を極めていくよりも、原理に對して反発的であろうとする。異次元の体系化を試みていたよう

に思われる。そのハイエクを通じて、本書でもさまざま論争的な課題が次から次へと示され、そのつど批判の矢面に晒していく。ハイエクは、本丸のインターネットの世界にいたる。最終章がインターネットの発展と生息的秩序として締めくくられるのはむろん偶然ではない。

「ハイエクの自律分散の思想をネットワークで実現したインターネットは、彼の予言どおり、WWWが登場してからほとんど数年の中に世界中の電話会社の人工的秩序を破壊し、グローバルな自生的秩序となつた」。

森里陽一



# 『早稲田と慶應——名門私大の栄光と影』

橘木俊詔著 講談社現代新書 定価756円

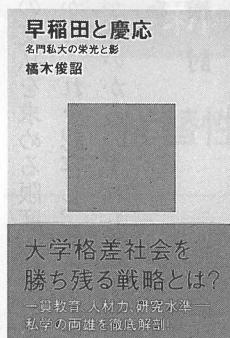
一流経済学者による書物だが、経済学の話はほんの少ししか出てこない。一貫した筋があるわけでもない。全体に余裕が感じられ、読み手に過分な要求をしない。肩の凝らない不思議な本だ。ビジネス誌が年に何度か行う大学特集はいつも売れ行きがいいそうだ。何となく気になる存在、それが大学なのかもしない。

想像するに、読み手は、早慶の出身者、受験生とその親、教育関係者であろう。実際、よく読まれているらしい。もしこれが東大と京大だったらそれほど読みたい気もしないかもしない。早慶はふつうの人でもがんばれば手が届くぎりぎりのところにある。だからこそ、この二校は日本の中流社会の窓の役割を果たしうるのだろう。

だがそれにしても、た

何となく気になる存在、それが大学なのかもしない。  
想像するに、読み手は、早慶の出身者、受験生とその親、教育関係者であろう。実際、よく読まれているらしい。もしこれが東大と京大だった

卷之三



くさん私大があるなかで、早稲田と慶應だけ特別なのはなぜなのか。その象徴する意味は何か。それは日本の大学問題どう関係しているのだろうか。

繰り返しになるが、特に大学問題の本質を考えさせてくれるとか、大学経営について新たなる知見をもたらしてくれるとか、そんな姿勢はない。むしろ、読み終わって実感するのは、大学といえども人気商売なのだというシンプルな事実である。

確かに早慶は人を惹きつける能力が高い。大学冬の時代といわれて受験者数が急減する中で、なお人を集めている。卒業生も、学界、ビジネス界、法曹界、マスコミまで多士済々である。これに加えて芸能・スポー

ツが強いとなると、いやがおうにも注目を集めてしまう。それを見て、さらに多くの優れた人材が集まつてくる。要はポジティブなフィードバックができるわけだ。

もちろん足りないところもある。他の国立大学と比較して、早慶にないのは研究力なのだそうだ。確かに世界の大学ランキングを見ると、一〇〇位以内に入っているのは東大や京大をはじめとする旧帝大だけである。

二〇〇位以内になつてようやくこの私立二校が現れる。これを逆から見れば、これまでの私立大学の繁栄にとつて、大学の使命たる研究はさほど大きく響かなかつたということである。興味深い事実と言える。

してもしかたないとはいえるが、近頃は、大学の世界はせせこましい年、大学の世界はせせこましい袋小路に迷い込んでいるようを見える。お客様である学生が少なくなれば、いろんな工夫をしようとするのも当然である。ファカルティ・ディベロップメントなどは今や聞かれない大学はないといつてよい。

その反映か、大学でも授業参観は珍しくなくなっているし、学生が教員を評価するのはどこでも行われていることだ。

明確に語られるわけではないながら、結局は大学にできることがもつと突き詰めて考えなさいといつていているように思える。もつと大きく考えろということだろうか。

すべての大学が早慶になれる

なかつたということである。興味深い事実と言える。

同時に、かなり丹念にしかも楽しく両校のルーツと現状を比較していく。そして、創立者の思いが、予想以上に濃厚に校風として受け継がれている事実を見出す。

そのなかで、強烈なアイロニカルなメッセージも読みとれる。おおらかだった時代を回顧

すべての大学が早慶になれる  
はずもない。そんなことはいう  
までもないながら、必要なのは  
その中核たる自律的な人材を育  
てるることである。そんな当たり  
前の原則を省みさせてくれる。  
きっとOBの方ならいつそう  
楽しく読めるだろう。

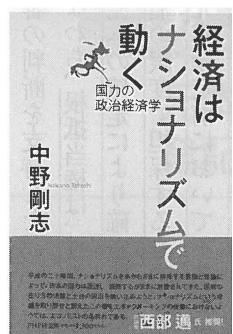
研究者  
森里陽



# 『経済はナショナリズムで動く——国力の政治経済学』

中野剛志 著 PHP 定価 1,365円

このタイトルは何であ  
ろうか。  
「経済はナショナリズ  
ムで動く」。自動車が工  
ンジンで動くとするな  
ら、経済のエンジンはナ  
ショナリズムなのか。  
そんな馬鹿な——。  
が、そのとおりなので  
ある。事実なのだからし  
かたがない。  
この命題を論証するた  
めに、職人が刀を研ぐよ  
うに、丁寧に一つひとつ  
の誤解をほどき、金属を  
鍛えていく。どこまでも  
強く、どこまでもしなや  
かである。  
この本は目的を問うも  
のである。読んでいるう  
ちにわかつてくる。ネー  
ション（国民）とはつま  
るところ人である。それ  
こそがあらゆる制度の中  
心である。言い換えれば  
国民以外はすべてが手段  
なのだ。  
そう考へると、グローバ  
ルナリズムも、ナショ



ナリズムの一形態であることが  
いやおうなしに理解されてく  
る。  
同時に、現在世界で進行する  
「危機」の眞の弊害も深いレベル  
で理解されてくる。このタイミ  
ングで刊行されたのが奇跡に思  
えてくる。  
国家だけではない。市場につ  
いても本質的な問い合わせをする。  
近代市場が国民国家による偉大  
なイノベーションであり、それ  
を健全に育むことがとりもなお  
さず国家の利益であることを説  
く。

しかも、市場とは自然的で無  
機的なものではない。少しうか  
いトピックになるが、とくに感  
銘を受けた記述が二箇所ある。  
ナショナル・シンボルと中間  
組織である。

「重要なのは『経済学の現実』  
ではなく、『経済の現実』であ  
る」。  
まことにもって至言と言うべ  
きであろう。神なき神学者ほど  
始末に負えないものはない。価  
値の中心に無頓着な科学大系ほ  
ど扱いに困るものはない。  
むしろ、著者はもつとよく、  
ありのままに見てごらんといつ  
ていい。おしゃべりをしない  
で、もつと目を凝らしてごらん  
と教えている。そこにはわれわ  
れの生きる世界への限りなくみ  
ずみずしい尊敬と愛が流露して  
やまない。

間組織である。現在もなお主た  
る力を持つのは企業であろう。  
失業が社会的に悪であり不道德  
なもの、この共同体を破壊し、  
人から自尊心を奪うためであ  
る。  
これら中間組織の力が国レベ  
ルで統合されたものが国力と呼  
ばれるものになる。

シンボルとは権威の象徴であ  
る。たとえば日本経済の場合、電  
子部品であることに異論はない  
であろう。日本を象徴する当該産業の  
リーディング・カンパニーが中  
國の名も知らぬ企業に買収され  
たらどうか。日本人の心は二つ  
に折れてしまうかもしれない。  
少なくともそれが経済的事件に  
とどまらないことは確かである。恐らく国としても威信をか  
け断固として買収を阻止する行  
動に出てもおかしくはない。こ  
れが権威としてのシンボルの正  
体である。  
さらに中間組織についてはど  
うだろうか。国家社会は森に似  
て、さまざま葉や腐葉土の堆  
積が生命を育む。そこでは共同  
体が力の源となっている。この  
共同体の力を保全する装置が中  
間組織である。頭脳のみに訴える言葉はすぐ  
に忘れる。肚に訴える言葉がい  
つまでも記憶に留まる。それば  
かりではない。行動に必要な勇  
気を与える。

社会生態学研究者  
森里陽一